
きみのかおり。

みまん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
きみのかおり。

【Zコード】
N2162F

【作者名】
みまん

【あらすじ】

無邪気な彼女と僕のある午後。僕は彼女の匂いが大好きで、彼女のベッドに寝転がっていたのだが……。ちょびっと甘めな僕と彼女のストーリーです。

(前書き)

初めて。みまんと申します。初めての作品で至らない点もたくさんありますでしあうが、お楽しみいただけたらなあ…、なんて願っています。それでは。

「うはあ……」

僕は大きく息をついた。

「ちよつとお。勝手に人のベッドにあがんないでおー。」

「だつてえ……」

「だつてじゃないのー」

彼女の寝床は2段ベッドの上。

僕は彼女の家にあがる度にこの場所にきてしまうのだ。
だって、

「……いい匂い……」

この狭い空間には、大好きな彼女の匂いが溢れている。
僕は枕に顔をうずめた。

「……前から気になつてんだけどさあ」

「んー？」

「……どんな匂いがしてるんですかねえ？」

「…………い、いい匂い……」

「答えになつてないよ」

くすくす、と彼女は笑う。

僕は、だつて……、といつて口を閉じた。

「ほら、降りて？もう時間だから」

彼女は僕が下に置いてしまったケータイをいじりながら言つ。彼女の家にいてもいいと言われたのはたしか18時までだったな、と思い出した。

今は、17時45分。

彼女は僕のケータイのロックを解除しようと頑張っている。

近くにあつた抱き枕をぎゅっと抱き締めた。

ふんわりと彼女の匂いがして幸せな気分になる。

「ほら、降りなさい」

さつきよつ強い口調で彼女が言つ。

「…………」

抱き枕を離して仰向けになり、瞳を閉じた。

寝入りである。

「あ

彼女はそれに感付いたよつて声をあげ、立ち上がったよつだ。

みしめしと2段ベッドの梯子の軋む音がして、僕の足元のほつつの
マットが少し沈む。

「寝ひきつたんですかー？」

わざとらしく彼女が聞く。

僕は何も言わないが。

「おーい、起きるー」

彼女は人差し指で、僕のふくらはぎを足首のまづからいつつ、と
優しくなでる。

くすぐったい。

「……あつ……」

声が漏れてしまつた。

僕はただでさえくすぐりに強いほうではないのだが、彼女の指は
そういう魔法でもかかっているかのように僕をくすぐつたく、気持ち良くなれる。

「んーへビおしたのかなあ？」

なんだこいつは。

彼女は天性のサディストなのだろうか。

つつつ、とのぼってきた指は、いつの間にか僕の脇腹をなぞつていて。

「……ふあっ……」

僕は声を堪えられなくて。

「ほら、寝てないのはわかつてんだから。起きてっ！」

彼女は僕の首をなぞりながら言へ。

僕は瞳を固く閉じてからぶんぶんと首をふった。

「…………」

彼女は困ったように笑つてゐる。
まんざらでもないようだ。

「……でもほらあ、お家のひとか心配しけやつよ？」

僕はまた首をふる。

「……そつかあ……」

そう言つと彼女は黙り込んでしまつた。

…………

そう思つていたら彼女は僕の足元から頭のほうへ移動を始めた。

薄く目を開けてみた。

彼女はこわいながらひかりへ右手をのばしてきていた。

また瞳を閉じると、少ししてから僕の左の脇あたりのマットがぐつと沈んだ。

彼女の右手はこまかにあるのだろう。

「起きて、お寝坊さん」

「いりうなしが彼女の声は楽しそうだ。

すると急に左脇のマットがさらに沈みはじめた。つまり彼女が僕の脇にかがみこんでいるのだ。

「んむつー?」

突然、僕の口は何かによつてふさがれてしまった。

柔らかくて、あたたかくて。

なんだろう。

最初は彼女の指だと思った。

空いている、左手。

でも違つた。

だって左手は僕の胸の上にあったから。

…もしかして、僕は恐ろしく鈍感なことをしていないだろうか。

一つの可能性にたどり着く。

心臓はばくばくと音をたてている。

顔は……。

わからぬけれど、きっと真っ赤なのだろう。

恐る恐る皿を開けてみる。

クリーム色の天井。

まるい肩。

もさもさとした黒い髪。

思わず触りたくなるような耳。

すべすべで、あつとふにふにあらうせつめた。

田の前に、それらはあった。

うん、間違いない。

僕は彼女にキスされていた。

初めての経験である。

どうしてよいかわからなくなつた僕は、とりあえずもう一度、瞳を閉じてしまつことにした。

そのあと、どれぐらい時間は過ぎたのだろうか。

僕の口は、あのあつい、柔らかいものから解放された。

僕は薄く口を開けた。

彼女はまぶしいばかりの笑みを浮かべていた。

「ほら起きて」

彼女が優しく言ったから、僕は片目を開けてしまった。
たぶん、かなり鬱陶しそうな顔してると、僕。

「顔、真っ赤だよ」

彼女がにやにやしていったので、僕は恥ずかしくなってしまった。

……わかつてますとも、そんなこと……。

「……み、見ないでくれ……」

僕は両手で顔を隠す。

ああ、なんと弱々しい声……。

すると両手首をがつと掴まれ、ひるがられてしまった。

……なんという力だ……。

「……せんぶ、せんぶ見せてつ？」

少し恥じらつたよつて、でも無邪気に、彼女は笑つた。

反則だよ、その笑顔は……。

「人」

でも、やっぱり恥ずかしくて彼女の目は見られなくて、僕は斜め下をむいた。

「かわいい」

ぼそり、と彼女がつぶやく。

「はあ！？」

そんなことを言われたのは初めてで、また僕の顔はさらりと赤みを増していくのだろう。

「好きだよ」

……そんなストレートに言わないでほしい……。

少し間を置いてから、僕は口を開いた。

「僕毛」

心の準備、完了である。

よいしょ、と重い体を持ち上げて、彼女の両手首を持って、なるべく真剣に、かつ優しく、僕は言った。

「お前のことが、好きだ」

彼女はむふふふふ、と笑つた。

めつたに顔が赤くなつたりするたちじやないのだ、彼女は。

まつたく、ズルいやツめ。

と、僕はつぶやいた。

彼女は可愛らしく、ニヒニヒと笑つてこる。

本当は押し倒してしまったかったけど、ぐつと堪えて彼女を抱き締めた。

「ん……？」

彼女は不思議そつな声をあげる。

僕は彼女の首筋に顔をうずめた。

なんとも言い難い、あの独特の匂い。
甘いようでそうではなく、

香水のようでもあるけど、それにしてはすじへ人のにおいがする。

麻薬つてこんなかんじなのかなあ、と僕は思った。

彼女の匂いは、酷い中毒性を持っていた。

「んよいしょ」

「あつ」

彼女が僕をひっぺがす。

せっかく人がリラックスしてたのに…。

「わあ、もう帰らないと。うちも弟、帰つて来いやうし。ね？」

うん、と仕方なく僕は頷く。

彼女は一足先にベッドから降りたようだ。

僕ものそのそと、そのあとに続く。

「心配しなくても、大好きだから」

梯子を降りた僕の耳元に背伸びをした彼女が囁いた。

「ん」

ぶつきいじめ返事をして、彼女の頭をなでながら。
猫みたいに甘える彼女は、まあそりやもうめちゃくちゃかわいく
て。

「それじゃあ…ね？」

サンダルを引っ掛けた僕は彼女を振り返る。

切ない。

「うんつ。じゃあねい

僕の気持ちを知つてか知らずか、彼女は無邪気に笑う。

まあ、知らないんだからナビケ。

ふわ、と息をついてドアを開けた。

「またねっ」

最後に彼女が可愛らしく言ったので、全部許してしまおひ。

(後書き)

いかがでしたか?」意見・「感想などありましたら、遠慮なくお願
いします。それでは、読んでくださいありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2162f/>

きみのかおり。

2010年10月17日07時48分発行